



小松 和彦  
(文化人類学者)

ミクロネシアに一月ほど調査に出かけていたこともあって、この数カ月を限っていうと、本をそれほど読んでいない。

熱帯の冷房施設のない狭く暑苦しい民宿では、じつくりの本を読む気分にはならないが、それでも、これはと思う本を何冊かもっていった。

書名を挙げると、A・グレーヴィチ『同時代人の見た中世ヨーロッパ』(平凡社)、若山滋『「家」と

「やど」(朝日新聞社)、阿部謹也『「世間」とは何か』(講談社現代新書)、そして話題になっていたJ・ゴルデル『ソフィアの世界』(日本放送出版協会)等々。

もちろん、持ち込んだすべての本をちゃんと読んだ

## 日本民族「神話」描き出す小熊著

わけではないが、そのなかでもっとも気合を入れて読んだのが、小熊英二『単一民族神話の起源』(新曜社)であった。

扱われているのは、明治中期から戦後までの日本人

・日本民族論の変遷を思想的・社会的視点からたどるといって、まことにスケ

ールの大きな重いテーマである。

日本民族論、著者の言葉で言えば日本民族「神話」の形成には、多くの人類学者や歴史学者が関係している。しかも、私の調査地と

も無縁ではない。この本は私にとって見逃すわけには

こもることになった戦後に、農耕民族を強調した「単一民族論」が主流を占め、高度成長期以降、再び新しい形の多民族国家論が現れてきている、ということになる。

感心したのは、この種の研究では著者の見解が表に

いかない、内容がとても気になる本であった。

この本の論点を大雑把にまとめると、日本民族論の主要な傾向は、朝鮮や台湾、南洋群島などの植民地

を抱えていた大日本帝国時代では「多民族・混合民族論」であり、植民地を失って日本人が日本列島に閉じ

い。必要なものは、少しばかりの強さと、叡知(えい)である」という見解に立っている。そこから「有力・有名な学説」もきわめて冷静に言説し神話として徹底的に相対化されることになる。眼(め)から鱗(うろこ)が落ちるような

指摘が随所にみられ、まさしくこの本は私の最近の大きな収穫であったといいたいだろう。

私の調査地のミクロネシアは、大日本帝国時代の日本語教育にもたずさわったことのある川村が思い描く「国際時代」のこれからの

著者は「異なる者と共存するのに、神話は必要な

治時代の日本語教育の実態や日本語・日本文化のミクロネシア文化への影響などを調べている。

その関係で読んだ川村湊『海を渡った日本語』(青土社)も、多民族国家としての大日本帝国論と密接に結びついたテーマを扱っている。日本の植民地における「宗主国語」としての「日本語教育」とは、異なる民族を大日本帝国に同化

していく手段であった。この時代の国語学者の言説も多民族国家論の論調を作り出した起源の一つであったのだ。

著者に同感したのは、日本語教育にもたずさわったことのある川村が思い描く「国際時代」のこれからの

著者は「異なる者と共存するのに、神話は必要な

れ、異なる者が互いにコミユニケーションをかわすために、現地の言語と融合して変容してゆくことをおそれない寛容性に富んだ「日本語」として描かれていることである。

実際、私はミクロネシアで、現地語に英語や日本語の入り交じった、まことに奇妙な言語で調査をして

日本の国際化とは、長い目でみれば、言語も、文化も、民族も、入り交じり互いに影響し合って変化していくことである。それはこれまで日本語や日本文化を捨てるのではなく、多民族国家である日本の度量の広さを意味している。そこに新しい文化がうまれてくるのである。

著者は「異なる者と共存するのに、神話は必要な